現代ブルガリア語の特徴・動詞時制形態について

Ст. Стоянов『ブルガリア語標準文法』を規範にして

二宮　由美

一般に広く用いられている St.ストヤノフによる『ブルガリア語標準文法』（Граматика на българския книжовен език）についてその目次の拙訳を紹介したい。次に現代ブルガリア文法の特徴とされる幾つかの点について、同著から引用するとともに、ブルガリア語の動詞時制システムについて L.アンドレイチンへの追悼の意を込めて書かれた佐藤純一教授による論文を紹介し、検討を加えてみたい。

本稿では時制と体、動作の表現するところの一時性と継続性についてストヤノフの文法書をもとに考えてみたい。そのために、継続性と完了体、一時性と不完了体、不完了体動詞とアオリスト、完了体動詞と各時制における関係を検証する。そして現代ブルガリア語の特徴のひとつである多くの時制形態が、この言語が総合的な言語から分析的な言語に転換を果たした上における役割を考察してみたい。

はじめに St.ストヤノフによる『ブルガリア語標準文法』目次の拙訳は以下の通りである。[1)]

St.ストヤノフは『ブルガリア語標準文法』のなかで、現代ブルガリア語

の形態システムにおける共通の主な特徴は、分析的な言語であるとしている。次に、総合的な（屈折言語的）文法構造と分析的な文法構造の概念について述べ、現代ブルガリア語における分析化の表示について例をあげている。

その後に、その他の特徴として、現代ブルガリア語の構造的特徴として「後ろに置かれる冠詞」(Задпоставен определителен член)について述べている。この冠詞は、他の言語と同様、古い指示代名詞から発達したものである。ブルガリア語の冠詞は、名詞の後にあり、弱い位置[2)]にあった指示代名詞 ть,та,то が、時の流れの中で指示的機能を失い、指示代名詞の前にある語の構成部分として、文法的範疇の「限定」を表す形態素として変容した。[3)]

その他の特徴として§147 ではアオリストとインパーフェクトについて、現代ブルガリア語においてこの 2 つの形が保持され、広範に用いられていることを指摘し、文学作品から例を挙げている。以下、斜体はアオリストを示し、斜体に下線はインパーフェクトを示す（下線は筆者による）。

① "Още докато го *<u>бранеше</u>* от кучетата, Петър Моканина *разбра*, че този непознат селянин не се отбил при него току-тъй, а го гони някаква беда" (Йордан Йовков)

「彼を犬から守っている時から、ペトル・モカニナはこの見知らぬ村人が特別な理由なしにモカニナのところに寄ったのではなく、何らかの災難が彼を追い払ったのだと理解した。」

② "В тоя миг навалякът при вратата *се разтика* и *даде* път на двама закъснели посетители, които *седнаха* тихо на свободните столове. Тогава Рада *погледна* и ги *видя*. Единият, по-старият, *беше* настоятелят – чорбаджи Мичо, а другият – Кириак Стефчов. Неволна тънка бледост *покри* лицето й, но тя *се постара* да не вижда тоя неприятен човек, който я *<u>смущаваше</u>* и *<u>плашеше</u>*" (Иван Вазов)

「その瞬間、ドアに群がる人々は乱れ、遅れて訪れた二人に道をあけた。

その二人は空いている席に静かに座った。その時ラダは少し目をやり、彼らを見た。一人は、年老いて言い張っているチョルバジイのミチョ、もう一人はキリアック・ステフチォフであった。思わず彼女の顔を蒼白さが覆った。しかしラダは彼女を困惑させ、怖がらせていたこのいやな人を見ないように努めた。」

上の例文を時制（アオリストとインパーフェクト、以下A/Ｉと記す）と動詞の体（完了体と不完了体、以下Ｃ／Ｈｃ記す）の点から検証したい。

例文①	*бранеше*	Ｈｃ／браня によるＩ	Ｈｃ／Ｉ
	разбра	Ｃ／разбера によるＡ	Ｃ／Ａ
例文②	*разтика се*	Ｃ／разтикам によるＡ	Ｃ／Ａ
	даде	Ｃ／дам によるＡ	Ｃ／Ａ
	седнаха	Ｃ／седна によるＡ	Ｃ／Ａ
	погледна	Ｃ／погледна によるＡ	Ｃ／Ａ
	видя	Ｃ／ видя によるＡ	Ｃ／Ａ
	беше	Ｃ／бях によるＡ	Ｃ／Ａ
	покри	Ｃ／ покрия によるＡ	Ｃ／Ａ
	постара се	Ｃ／постарая се によるＡ	Ｃ／Ａ
	смущаваше	Ｈｃ／смущавам によるＩ	Ｈｃ／Ｉ
	плашеше	Ｈｃ／плаша によるＩ	Ｈｃ／Ｉ

結果をみてみると、完了体動詞によるアオリスト（Ｃ／Ａ）、不完了体によるインパーフェクト（Ｈｃ／Ｉ）の２つに分類され、計 12 の動詞のうち（Ｃ／Ａ）と（Ｈｃ／Ｉ）の比は９対3、３対１となる。

一般に完了体と不完了体のどちらもアオリストとインパーフェクトの時制をもつことができるが、概ねアオリストは完了体を用い（Ｃ／Ａ）、イン

パーフェクトは不完了体を用いる（Ｈｃ／Ｉ）とされている。この一般論に則した順当な結果といえる。

次に動詞の現在時制の活用形について§149と§363で述べている。
ブルガリア語の現在時制の活用形については、第1変化（e変化）、第2変化（и変化）、第3変化（a変化）（以下、Ⅰe、Ⅱи、Ⅲaと記す）そして不規則変化がある。

§149　現在1人称単数における広範な動詞語尾-мにおいては、古代ブルガリア語においては語幹母音のない動詞と ИМѢТИ が-Мь 語尾であったこと、後にこの語尾が広く普及し、新ブルガリア語の第3変化を形成したと指摘している。[4)]

同じく活用形について§363 古い活用形と新しい活用形においては、古代ブルガリア語において 5 つの活用形があったとし、第 1 変化接尾辞-Е-第 2 変化接尾辞-НЕ-、第3変化接尾辞-Ѥ-、第４変化接尾辞-И-、（以下、Ⅰ-Е-、Ⅱ-НЕ-、Ⅲ-Ѥ-、Ⅳ-И-と記す）そして語幹母音のない動詞を挙げている。次にこの５つの活用形がどのように３つの活用形へと構成していったかを示している。それは、Ⅰ-Е-とⅡ-НЕ-、そしてⅢ-Ѥ-の一部分が新ブルガリア語のⅠに、Ⅳ-И がⅡに、Ⅲ-Ѥ-の大部分がⅢを構成した、と述べている。そしてⅠとⅡ活用形は古い接尾辞を保っていることから古い活用形とする一方、Ⅲ活用形を新しい活用形としている。[5)]

現代ブルガリア語はスラヴ諸語のもとである古教会スラヴ語よりも多くの動詞の時制形態を有しているが、この時制形態の解釈について半世紀以上の論争があった。[6)]

Irina K. Bunina と Georgi Gerdzhikov による時制形態のモデルを佐藤純一教授はその論文の中で紹介し比較検討している。

1970年に発表されたBuninaによる時制形態モデルによって、彼女は時制の最大多数モデルを仮定し、現代ブルガリア語の時制システムを論証しようと試みた。しかし、時制と体（Aspect）を厳密に区別し、また純粋な理論を重視したため試みは成功しなかった。

Buninaは現代ブルガリア語には、意味論の上で8つの時制があると主張している。The Future Prefect in the Past時制を通常のテキストで用いられることが稀であるという理由で、故意に除外している。このことを佐藤純一教授はギリシャ伝説の「プロクルステスの切断」と評し、Buninaが仮定したモデルのなかに、この時制の場所がなかったことが排除の理由であった、と述べている。[7)]

次に、1973年に発表されたGerdzhikovによる時制形態モデルのなかで、彼は現代ブルガリア語の動詞時制モデルについて立方体を用い、三次元で表現している。形態論と意味論の融合という点で、彼のモデルは新しい解釈であった。

Gerdzhikovはブルガリア語のImperfect時制についてアオリストと対比し関連付けるという概念を否認し、文脈によって明白あるいは暗示的に表現された付加的な過去の時点を通して現在に関連するものであると主張している。[8)]

L.Andrejchinはブルガリア語の時制形態について、9つの時制のうち「絶対的基本時制」として現在、過去、未来の3つを、そして「相対的時制」として他の6つを関係付け定義した。[9)]

この論文の中で佐藤純一教授は、ブルガリア語の動詞はスラヴ語派の特徴として完了と不完了という「体」（Perfective vs. Imperfective Aspects）の文法的対立を保つが、それは「時制」と並行していることを指摘している。そして不完了体動詞の結果を伴った完了時制（The Resulative Perfect of animperfective verb）と同様に、完了体動詞の結果を伴わない半過去時制を断定することは

可能であり、公正であると指摘している。[10)]

次に、時制と体の問題に関し、時制については本校の註1§360-398を参照、体については同じくストヤノフによる標準文法の中から、動詞の体（вид）の項を以下、参照してみたい。

はじめに「体」について「体とは文法的な意味で定義あり、それによって動詞に差異をもたらし、かつ同じ動作を意味する。」とし、例えば、ある動詞の動作の表現するところが、限定がなく、限定的な時間における全体を含まない、そのような動詞は不完了体であるとして例をあげている。例 бера（摘む），вървя（歩く），давам（与える）。

次に、「ある動詞の動作の表現するところが、限定的で時間の中で終わってしまう全体性を表すもの、このような動詞を完了体である。」と定義し、同じく例をあげている。例 събера（集める），　извървя（歩き終える），　дам（与える）。

続けて、「体」は独立した文法的意味であり、名詞に性があるように、動詞には文法的な意味「体」があり、それは動詞の活用形によって測られるものではないとして、ある動作を表現するとき2つの動詞、完了体と不完了体の例をあげている。

例 взема-вземам（取る），видя-виждам（見る），дам-давам（与える）
これらの対（ペア）の動詞は同じ語彙的な意味を有するが、その文法的な意味である「体」によって区別される。また、文法的範疇の「体」は特別な形態的指標はない、としている。[11)]

動作の継続性・一時性と「体」の範疇の関係

§350では上記の関係はないことを次のように説明している。
継続性と完了体

継続の動作を完了体で表現できることを次の例文を挙げて説明している。
През лятото имам намерение да *прочета* отново съчненията на Йовков.

（夏にヨフコフの作品をもう一度読み終える意思がある。）

斜体 *прочета* は чета と対をなす完了体であるが、それが比較的長い時間続くことになる。その継続性にも拘わらず、読み手はその継続性には始まり、持続、終わりによって、限定されていると理解する。限定的な時間の中での経過と理解し、完了体が用いられている。さらに次の例文を挙げている。
Имах възможност да *пропътувам* цялата страна.

（国中を旅する機会があった。）

この例文でも、比較的長く続いた事実の動作が、完了体 *пропътувам* で表現されている。加えていえば *пропътувам* という動詞自体に「*限定した*地域を旅行する」という意味を有している。

一時性と不完了体

次に、動詞の不完了体によって一時的な動作、その連続、瞬間的な動作までも表現できることを次の例文を挙げて示している。

В този момент няколко нови посетители *влизат* и *сядат*. Отпосле той казваше, че на два пъти лампата в стаята на Нона *беше угасвала* и пак *беше светвала*. (Йордан Йовков)

（この時、数人の新しい来訪者が入り、座った。間もなく彼は言うのだった。二度、ノナの部屋のランプは消され、そしてまた点いたと。）

斜体の動詞は本文の中で一時的・瞬間的な動作を表しているが、それとは無関係にすべて不完了体の動詞が用いられている。

文法的範疇の「体」と「時制」との関係

§351 では「体」は「時制」の範疇から完全に独立したものであり、動詞

の「体」は発話時に関する動作の状況、あるいは過去、未来のある時点に関する動作の状況によって、影響を受けない無関係なものである、としている。従って、完了体動詞も不完了体動詞もすべての時制においてその形を有するとしている。次にその例を挙げている。

不完了体動詞とアオリスト

Един само буден сред толкова спящи, / ти един за всички като демон бдящи / *работи, бори се, стреска, вълнува* / ... (Иван Вазов)

（これほどの眠れる人々の中で、ただ一人目覚め、君はすべてに対する一人、眠らない悪魔のように、働き、戦い、驚かせ、心配させる、、、）

斜体の不完了体動詞 *работя, боря се, стрескам, вълнувам* はアオリストの時制で用いることが可能で、発話時の前に動作が終了していることを意味している。

完了体動詞と時制

次に вдигам と対をなす完了体動詞 вдигна が様々な時制で、用いられていることを次の例文を挙げて示している。

Вдигна(сег.вр.) ли знамето, тръгвайте!（旗が揚がったら、出発して下さい。）

Но, вдъхновен с любов аз жива, / в сърце си *вдигнах*(мин.св.) тебе трон / ...(Найден Геров)

（しかし、愛とともに精神的に私は生きている。心には王座が昇った。）

...там, дето либе хубаво / черни си очи *вдигнеше*(мин.несв.) / и с оназ тиха усмивка / в скръбно ги сърце *впиеше* / ...（Христо Ботев）

（恋人が美しいあの場所、黒い瞳を見上げ、そしてあの静かな微笑みで、悲しげに心を打つ、、、）

但し、現在とインパーフェクトの時制において完了体動詞を統語的に用いることはほぼ従属文のみに限られていること、その一方、不完了体動詞の統語的用法は自由であることを指摘している。[12)]

結　び

「時制」と「体」の問題については、東スラヴ語のロシア語において中世ロシア語と現代ロシア語の相違点にひとつに、過去時制が挙げられ、中世ロシア語において、過去を表す時制が複数あったが、出来事の様相を表現するのに時制が担っていた大きな役割を現代ロシア語では主に体（aspect）がその役割を担うという、「時制中心」から「体中心」への移行プロセスがあった。[13)] ところがブルガリア語は古代スラヴ語の系統である南スラヴ語に属し、言語としての古さを示す複数の時制が現存している。そのため先述のようなロシア語にみる移行プロセスはなかったと推測される。その代わりにブルガリア語に生じた変化は格変化の消失にともなう、総合的な（屈折語尾的）言語から分析的な言語への転換であった。この転換を支えたもののひとつは、あたかも生き物の脚に相当する、整然かつ柔軟な動詞時制形態であったと筆者は考える。整然とした動詞時制形態とは、佐藤純一教授が批評を加えている G. Gerdzhikov が示した見事な立方体三次元の動詞時制形態であり、柔軟な動詞形態とは本稿で試みたブルガリア語における体と時制との中和的な関係、継続性と完了体、一時性と不完了体、不完了体動詞とアオリスト、完了体動詞と各時制における柔軟な関係にあると筆者は考える。

註1　S.ストヤノフ　『ブルガリア標準語文法　音声学と形態論』　ソフィア　1964年
Стоян СТОЯНОВ "Граматика на българския книжовен език фонетика и морфология" София 1964

序文

Ⅰ　序論

言語、言語の起源と本質§1　方言、大方言、標準語、民族語§2－5　言語親族関係と語族§6　スラヴ諸語におけるブルガリア語§7－8　9世紀、ブルガリア標準語の起源と発達§9－10

新ブルガリア標準語の創出と発達§11

Ⅱ　音声学

音声学の対象と課題、音声学の種類§12　音声学における実験的研究の諸方法§13

発話行為の音声から理解される観点§14　音響学分野の基本的諸概念§15－18

人間の音声器官§19－20

ブルガリア標準語の音声学システム構造

音と文字の関係§21－23　口頭言語と所記言語（話し言葉と書き言葉）の関係§24

音声と音素の表記§25　転字§26　音の分類と調音§27

母音

母音の共通的特徴§28　ブルガリア語母音の調音§29　ブルガリア母音の分類§30

表　ブルガリア標準語の母音§31　書き言葉における母音の意味§32

子音

子音の共通的特徴§33

子音の種類

分類の基本§34

1．噪音と鳴音§35　2．硬子音と軟子音§36－41　3．有声子音と無声子音§42

4．唇音子音と舌音子音§43－45　5．閉鎖音、隙間音、破擦音§46

表　ブルガリア標準語の子音§47

社会言語学視点からの話法の音

音素§48　音素のバリエーション§49　ブルガリア語音素システムの幾つかの特徴§50

音声学視点からの語のアクセント

音節§51　音節の種類§52　ブルガリア語の音節構造§53　内部音節の境界§54

書き言葉における改行時の語の区切り方§55

アクセント

アクセントとその種類§56　ブルガリア語におけるアクセントの性質§57

第一アクセントと第二アクセント§59　２つのアクセントを有する語§60

二通りのアクセントを有する語と形§61

言葉の流れの中でアクセントのない語（前接語と後接語）§62

アクセントの同音異義語的機能§63　書き言葉にけるアクセントの意味§64

論理的アクセント§65

音の変化

音の変化から解明される基本的視点§66　変化の組み合わせ§67

自律的（独立的）変化§68

音の（音声学的）法則

音の法則§69　音の法則の性質§70　現代的音の法則と歴史的音の法則§71

A．ブルガリア語における現代的音の法則

現代的法則的な音変化の基本的な種類§72

Ⅰ．音の交替

1．有声子音と無声噪音の同化§73－75　2．絶対語末の有声噪音の無声化§76－77

3．子音間の異化§78　4．アクセントのない母音の縮小§79－80

5．軟母音の変異　＋a：e（['a：e]）§81－85

Ⅱ．音の挿入

語末における[ъ]の挿入§86　語中における[ъ]の挿入§87　[Й]の挿入（йотация）§88　[Т]と[Д]の挿入§89

Ⅲ．音の欠落

接尾辞-СК-(стб.-ьСК-)による[С]の欠落§90　[Т]と[Д]の欠落§91

Ⅳ．音の移動

子音間[Ъ]の位置におけるグループ[-ЪР-][-ЪЛ-]§92　音移動の例§93

Б．ブルガリア語における歴史的法則の影響

歴史的音声法則の基本的種類§94

Ⅰ．音の交替

母音変異[o：e]§95　語根の母音変差（ОТГЛАС）§96

交替[Г：Ж]，[К：Ч]，[Х：Ш]（軟口蓋子音の第一口蓋化）§97

交替[Г：З]，[К：Ц]，[Х：С]（軟口蓋子音の第二口蓋化）§98

交替 [Г：З]，[К：Ц]（軟口蓋子音の第三口蓋化）§99
交替 [Ц：Ч]，[З(＜s)：Ж] §100
[j] の影響による子音変化§101
II．音の挿入
[Л] の挿入（l-epentheticum）（交替 [б：бл]，[П：ПЛ]，[В：ВЛ]，[М：МЛ]）§102
[Н] の挿入（交替ゼロ：[Н]）§103
III．音の欠落
[е] と [ъ] の欠落　（交替 [е]：ゼロ，[е：й]，[ъ]：ゼロ）§104
音 [В] の欠落（交替 [в]：ゼロ）§105
III　文字と正書法
文字の起源と発達§106－108　ブルガリア字母の起源§109　グラゴール文字§110
キリル文字§111　表　古ブルガリア字母§112
正書法と正書法規則
正書法§113　正書法規則§114
ブルガリア語正書法の発達
新ブルガリア標準語の正書法構造に関する論争と方向（学派）§115
マリン・ドゥリノフの正書法§116　正書法改革§117
ブルガリア語に導入された外来語の正書法§118－124
IV　文法
文法の対象と文法の種類　文法の対象§125　文法の種類§126
新ブルガリア語のより重要な文法§127
形態論
形態論の対象§128
語とその意味
語の定義の試み§129　語の意味§130　文法的範疇§131
語の音の構成と意味との関係§132
語の構造　形態素§133
形態素の種類
語根§134　接尾辞と接頭辞§135　語尾§136　定冠詞§137　接続形態素§138
語幹
語幹の概念§139　語幹の種類§140　複合語§141　複合文法型§142　短縮形§143

現代ブルガリア語の形態システムの共通性

総合的文法構造と分析的文法構造の概念§144

現代ブルガリア語における分析化の表示§145

他の性質的特徴§146－152

語の文法的分類

文法的観点からの分類の種類§153　意味論的文法の分類§154　形態論的分類§155

統語論的分類§156

名詞　意味論的・文法的特性§157－159

名詞の種類

A　意味による名詞の種類

1. 普通名詞と固有名詞

普通名詞§160　固有名詞§161

普通名詞から派生した固有名詞§162

固有名詞から派生した普通名詞§163

固有人称名詞§164

2．物質名詞と抽象名詞の意味§165　3．集合名詞§166　4．活動名詞§167

Б　構成による名詞の種類

単純名詞と複合名詞　単純名詞§168　複合名詞§169

非生産名詞と生産名詞　非生産名詞§170　生産名詞§171

名詞の生成

A　単純名詞の生成　共通の状況§172

I　共通名詞の生成

人を表す共通名詞§173　動物と植物を表す名詞§174　対象を表す名詞§175

公共の場所、機関、職場、その他の活動が行われる場所の名詞§176

活動を表す名詞§177　性質、

特性、関係、心的状態、その他の抽象的概念を表す名詞§178

集合名詞§179　指小・愛称名詞語と指大名詞語§180

II　固有名詞の生成

人を表す固有名詞§181　居住地に関する固有名詞§182

Б　複合名詞の生成　共通の構成と意味論的特徴§183

I　ブルガリア語内起源の複合名詞

1. 形態素結合を伴う複合名詞§184－186
人を表す名§184　対象と場所を表す名§185
抽象的概念の名詞（行為、状態、性質、特性その他）§186
2. 形態素結合を伴わない複合名詞§187－192
II　外来起源の複合名詞§193
名詞の文法範疇
A　名詞の性
文法範疇の「性」§194　文法性と自然性の関係§195
文法的な形と文法性の関係§196　共通性の名詞§197
Б　名詞の数
文法の「数」　§198
1．男性名詞複数形の形成
男性単音節名詞の複数形§199　男性多音節名詞の複数形§200
男性名詞複数の数詞形§201
2．女性名詞複数形の形成§202
3．中性名詞複数形の形成§203　単数形のみの名詞§204　複数形のみの名詞§205
B　名詞における格の形の残余
古い名詞の屈折の喪失§206　男性名詞呼格形§207　女性名詞呼格形§208
呼格形のない名詞§209
Г　名詞の冠詞形（文法的範疇　限定の表現）
文法範疇の特定性の本質と意味§210　ブルガリア語の定冠詞の形態論的本質§211
I　形態論と音声学的特徴による名詞の冠詞形（形態論的音声学的見地）共通規則§212
1. 単数　a) 男性§213－214　б) 女性§215　в) 中性§216
2. 複数§217
II　意味の共通的特徴による名詞の冠詞形（意味論的見地）
1. 固有名詞§218－222　普通名詞§223－225
III　文中の役割による名詞の冠詞形（統語論的見地）
冠詞形における統語論的見地の共通性§226　名詞が常に冠詞形になる場合§227
名詞が常に冠詞形にならない場合§228
形容詞
意味論・文法的特徴§229－230

意味による形容詞の種類§231

性質形容詞§232　関係形容詞§233　関係形容詞から性質形容詞への変換§234

分詞の形容詞§235

語形成と構造的観点による形容詞の種類　§236－237

形容詞の形成

I　単純形容詞

1．性質形容詞の形成§238　2．関係形容詞の形成§239

3．外来起源による形容詞の接尾辞§240

接頭辞による形容詞の形成§241

II　複合形容詞

共通の性質§242

1．2つの基部が従属関係にある複合形容詞

動詞語根の独立的な部分を伴う合成形容詞§243

名詞の独立的な部分を伴う合成形容詞§244

形容詞の独立的な部分を伴う合成形容詞§245

分詞の独立的な部分を伴う合成形容詞§246

2．2つの基部が同等関係にある複合形容詞§247　形容詞の独立用法と名詞化§248

形容詞の文法的範疇

A　形容詞の性と数

形容詞の性§249　形容詞の数§250　性と数の形容詞形成の音声変化§251

Б　形容詞における格変化の残余§252

B　形容詞の冠詞形

I　形態と音声の特徴による形容詞の冠詞形

1．単数

男性の冠詞形§253　女性の冠詞形§254　中性の冠詞形§255

不変形を有する形容詞の冠詞形§256

2．複数　§257

II　限定としての形容詞の冠詞形

1．非特定化定語　普通名詞の定語としての形容詞の冠詞形§258

固有名詞の定語としての形容詞の冠詞形§259

呼びかけの定語としての形容詞の冠詞形§260

同種定語としての形容詞冠詞形§261
2. 特定化された定語　独立限定としての形容詞の冠詞形§262
Ⅲ　述語的定語としての形容詞の冠詞形§263
Ⅳ　呼びかけとしての形容詞の冠詞形§264
Г　形容詞の段階化
文法的範疇における「級」の本質§265　比較を表す級の形と意味§266
数詞　意味論的・文法的特徴　§267－270
基数詞　形成§271　男の人を表す基数詞§272　概数の基数詞§273　指小基数詞§274
基数詞の冠詞形§275
順序数詞　形成§276　順序数詞の性と数§277　指小順序数詞§278　順序数詞の冠詞形§279
分数§280　数詞からの名詞§281　数詞からの形容詞　割合を意味する形容詞§282
第一部分に数詞を有する複合形容詞§283
代名詞　意味論的・文法的特徴§284－285　代名詞の種類§286
人称代名詞§287－288　人称代名詞の用法§289
所有代名詞§290－291　所有代名詞形の用法§292　所有代名詞の冠詞形§293
再帰代名詞　種類§294
1．再帰人称代名詞§295－297　2．再帰所有代名詞§298－300
指示代名詞§301－303　疑問代名詞§304－307　関係代名詞§308－310
不定代名詞§311－314　否定代名詞§315－317　一般化代名詞§318－320
動詞　意味論的・文法的特徴§321-322
動詞の種類と形§323　他動詞と自動詞§324　人称動詞と無人称動詞§325
普通動詞と再帰動詞§326　人称形（定形）動詞と非人称形（不定形）動詞§327
単純動詞と複合動詞§328　単純動詞の形と複合動詞の形§329
動詞の形成　概要§330
Ⅰ　名詞からの動詞形成§331　Ⅱ　間投詞からの動詞形成§332
Ⅲ　他の動詞からの動詞形成§333
動詞接頭辞の形態論的機能§334　動詞接頭辞の起源と意味§335-336
動詞の文法的範疇
A　動詞の人称§337　Б　動詞の数§338-341　B　態の範疇§342-344
能動態§345　受動態§346

Г　動詞の体　「体」の範疇§347-352

不完了からの完了体動詞の形成、完了からの不完了体動詞の形成

不完了体動詞の基本的範疇§353

I　不完了からの完了体動詞の形成§354

II　完了からの不完了体動詞の形成§355　新しい不完了体動詞の形成の特徴§356

接尾辞による不完了体動詞形成の際の音変化§357

表　不完了からの完了体動詞の形成と完了からの新しい不完了体動詞の形成§358

Д　動詞の時制　「時制」の範疇§359　ブルガリア語における動詞の時制§360

（訳者註：時制の名称に番号、試訳、英訳、現在1人称単数の活用形を加えた。）

①現在　Сегашно време, the Present, (чете)

形§361　現在を基本にした動詞の分類§362　古い活用形と新しい活用形§363

助動詞 съм の活用形§364　現在時制の動詞形のアクセント§365

現在時制動詞形のいくつかの特徴§366　動詞の基本形§367

現在時制形の意味§368　現在時制形の用法§369

②定過去　Минало свършено време, the Aorist, 完了過去 (чете)

形§370　完了過去時制を基本とした接尾辞による動詞の分類§371

完了過去時制形の特徴§372　完了過去時制形のアクセント§373

完了過去時制における助動詞 съм (бъда) の活用§374　完了過去時制形の意味§375

用法§376

③半過去　Минало несвършено време, the Imperfect, 未完了過去 (четеше)

形§377　助動詞 съм (бъда) の活用§379　アクセント§380　意味§381　用法§382

④現在完了　Минало неопределно време, the Perfect,　(е чел)

形§383　現在完了時制における助動詞の位置§384　助動詞 съм の形§385

アクセント§386　意味§387　用法§388

⑤過去完了　Минало предвалително време, the Pluperfect, 完了過去 (беше чел)

形§388　意味と用法§389

⑥未来　Бъдеще време, the Future, (ще чете)

形§390　ща, щеш. . . の形+省略不定形§391　意味と用法§392

⑦未来完了　Бъдеще предвалително време, teh Future Perfect,　(ще е чел)

形§393　意味と用法§394

⑧前未来　Бъдеще време в миналото, the Future in the Past, 過去未来 (щеше да

чете)
形§395　意味と用法§396
⑨前未来完了　Бъдеще предварително време в миналото, the Future Perfect in the Past,　過去未来完了 (щеше да е чел)
形§397　意味と用法§398
E　動詞の法　「法」の文法的範疇§399
1. 直説法　意味§400　形§401
2. 命令法　意味§402　形§403
3. 条件法　意味と形§404　用法§405
4. 伝聞法　意味§406　形§407　伝聞法の強調の形§408　伝聞法の用法§409
動詞の非人称（不定形）形
A　分詞　意味論・文法的性質§410　分詞の種類§411　性と数による分詞の変化§412
分詞の冠詞形§413
現在能動分詞　形§414　現代ブルガリア語における現在能動分詞の受容§415　意味と用法§416
定過去分詞　完了過去能動分詞　形§417　意味と用法§418　他の過去能動分詞の残余§419
半過去分詞　未完了過去能動分詞　形§420　起源と用法§421
過去受動分詞　形§422　意味と用法§423
現在受動分詞の残余　形§424　意味と用法§425
Б　副動詞　特徴と起源§426　形§427　用法§428
B　動詞派生名詞　種類と起源§429　接尾辞-НЕを伴う動詞起源の名詞§430
接尾辞-НИЕを伴う動詞起源の名詞§431　動詞起源名詞の用法§432
Г　インフィニティブ　初期の形§433　現代ブルガリア語の省略不定形の用法§434
副詞
意味論・文法的特性§435　副詞の起源と構成§436　形容詞からの副詞§437
名詞からの副詞§438　数詞からの副詞§439　動詞からの副詞§440
代名詞的副詞§441　意味による副詞の種類§442
前置詞　意味論的・文法的特性§443　用法§448-450　起源と構成§451　前置詞と接頭辞§452
幾つかの前置詞を用いる際の特徴　前置詞вとуの標準語的用法§453

前置詞 на の特徴的用法 § 454

接続詞 意味論的・文法的特性 § 455 起源と構成 § 456

1．本来の接続詞 § 457 2．接続語 接続的代名詞 § 458 副詞的接続詞 § 459

意味による接続詞の種類 § 460 1．同位接続詞 § 461-463 2．従属接続詞 § 464

間投詞 意味論的・文法的特性 § 465 間投詞の起源 § 466-467

間投詞による他の語の形成 § 469

助詞 意味論的・文法的特性 § 470 助詞の起源 § 471 助詞の種類 § 472

註 2 Ст. Стоянов, Граматика на българския книжовен език, София, 1964 стр. 151, стр. 215

註 3 там же, стр. 151

註 4 там же, стр. 152

註 5 там же, стр. 339－340

註 6 Jun-ichi SATO, "On the system of the Bulgarian verb thense forms – To the memory of prof. Ljubomir Andrejchin," *Труды кафедры русскаво языка и литературы*, 1978 Vol. XXVI No. 5, The proceedings of the department of foreign languages and literatures, college of general education, University of TOKYO, pp. 47-58 のうち p. 54

註 7 *Ibid.*, pp. 52－53

註 8 *Ibid.*, p. 54

註 9 *Ibid.*, p. 48

註 10 *Ibid.*, pp. 56－57

註 11 там же, стр. 319

註 12 там же, стр. 320-321

註 13 丸山由紀子「１７世紀末のロシア語文献における過去時制形の用法について」から引用，『ロシア語ロシア文学研究』第３３号, 25 頁, 日本ロシア文学会, 2001 年

参考文献

寺島憲治著『エクスプレス・ブルガリア語』，白水社，1999 年

J. デュボワ他著、伊藤晃他訳『ラルース言語学用語辞典』、大修館書店、1980 年